15　13版　朝日新聞　2025年(令和7年)10月28(木)　第28種郵便物認可

つくば万博の森　開設40年

3万本の植樹　豊かな生態系育む

公益財団法人森林文化協会が運営する「つくば万博の森」（茨城県つくば市、9・97ヘクタール）が今年、開設から40年を迎えた。企画段階から2年がかりで入念に作成された広大な構想は、里山ならぬ豊かな生態系を持つ森林に成長し、国の自然共生サイトとも認定された。多くの人に親しまれている。（石井正文）

つくば万博の森は、宅地造成で山の南に位置する宅地に、1985年のつくば万博を機に、マツクイムシを取り除くなど、朝日新聞社と、同社が出資に設立した森林文化協会が植樹した。森林文化協会は、林野庁の国有林に緑化を依頼し、国有林に縁故のある樹種が選ばれた。

森林文化協会は、林野庁東京森林管理局（現関東森林管理局）、茨城県、地元の自治体、国土緑化推進機構（現国土緑化推進機構）などと、専門家らが参加する「自然共生サイト」に認定された。森林文化協会は、保全されている区域を国が認定する「自然共生サイト」に認定されたことを受け、今年3月に、国土緑化推進機構と、専門家の意見を聞いて、登山口などに設けられている、森林内の広葉樹には枯れたものが多いことから、植樹した約3万本のうち、約1万2千本の広葉樹を残すことを決めた。

専門家に委託した調査で、夏の暑さに耐えられる広葉樹が多いことが分かった。間伐した樹材が廃棄物として処理されていることから、2024年に、国際的な取り組みなどで生物多様性が保全されている区域を国が認定する「自然共生サイト」に認定された。

森林文化協会は、樹齢を重ねた樹木などを活用した、生物多様性を維持するための、森を守り育てることが大切です。

ヒノキを中心とした針葉樹のほかヤマザクラも成長しているつくば万博の森

所在地　茨城県つくば市 宝篋山中腹（標高約210～400㍍）

広さ　9.87㌶（うち遊歩道部分0.24㌶はつくば市が管理）

主な経緯

- 1985年　4月に東京都林局と森林文化協会が分収造林契約を結ぶ。5月に植樹祭
- 86年　記念碑の除幕式
- 87年にかけて約3万本のヒノキ、ヤマザクラなどの広葉樹を植樹。約7年間、委託して毎年下草刈り
- 97～2001年　森林作業入門
- 02年　森林ボランティア講座
- 09年　間伐・除伐
- 16年　植樹後7・30周年記念祭山
- 22～25年　間伐
- 25年　40周年記念イベント

調査で確認された主な生き物

- 哺乳類　・イノシシ　・ニホンノウサギ　・タヌキ　・ニホンリス　・アナグマ　特定外来生物のアライグマでも確認、モニタリングを継続
- 鳥類　・シジュウカラ　・カケス　・メジロ　・ミソサザイ　・ツミ　・ヤマガラ　・ヒヨ　・ウグイス
- 昆虫　・ナツアカネ　・アカハナカミキリ　・オニヤンマ　・ヤマトシジミ　・カラスアゲハ　・オオスズメバチ
- 植物　・オオヒヨドリバナ　・コナラ　・ベニシダ　・ヒノキ　・クズ　・ヤマザクラ　・ガマズミ　・キブシ　・フモトシダ

（グラフ・つくば市資料を元に）

来月3日に観察会や林業体験

「つくば万博の森」開設記念イベント

- 日時　11月3日（祝）　午後1時30分～同3時30分
- 集所　「つくば万博の森」記念広場（宝篋山中腹）
- 行程　午前11時40分　ホテル日航つくば1階ロビー集合（下又つくば駅徒歩3分）＝マイクロバス、徒歩（約40分）で移動
- 内容　自然観察会、林業体験会など（いずれも参加無料）
- 申し込み　参加希望者全員の氏名・年齢と代表者の連絡先・電話番号を明記して応募フォーム（https://www.shinrinbunka.or.jp/tsukuba40/）へ。10月15日締め切り（応募多数の場合抽選）

・11月2日までには3日の樹花市開催日、ホテル日航つくばの特別プラン（朝日のもと）約朝食付き1万2千円（税込み）＞を利用可

・問い合わせ　森林文化協会イベント係（03・5540・7686）

支援に一層の力

朝日新聞社は、社会貢献活動の重視などの考え方に「サステナビリティ基本方針」を制定した。森の間伐や環境整備などの支援により、一層、力をそそいでいきます。

記念碑に名 孫も喜び

地元県収穫市の小笠原庄次さん(81)は3年前、次女夫婦と2人の孫とともに、つくば万博の森を訪れた。

広場にある記念碑に刻まれた一家の名前を探して孫に見せた。孫は自分の母親の名前もあり、うれしそうだったという。

小笠原庄次さん夫妻

40年前、朝日新聞紙上で植樹募金の広告を見かけ、「碑に名前が刻まれるなら記念になる」と思い申げた。2010年、協会が贈った30周年記念登山で初めて万博の森を訪れ、いつか孫を連れてきたいと思ったという。

今も毎週のように山歩きに出かけている。「奇付で植えられた太かな苗を森に育った。孫たちも自然を好きになり、いつまでも大切にしてほしい」と願う。

自然共生サイト 448カ所に

日本の生物多様性は過去50年間、損失・劣化傾向にある。環境省が2021年に公表した「生物多様性及び生態系サービスの総合評価」（JBO3）によると、里地里山の自然が失われたことや、里山立てによる干潟の減少、外来種の定着、気候変動などが原因だ。

豊かな生物多様性は、水や食糧をもたらし、防災や人々の健康、文化に大切な役割を担っている。30年までに生物多様性の損失を止め、反転に転じる「ネイチャーポジティブ」が国際的潮流になっており、日本もその達成を国家戦略に掲げている。その具体的な施策の一つが自然共生サイトの認定だ。23年度に始まり、計448カ所（25年度第1回認定分含む）ある。

25年度から法律に基づいてサイト管理者の活動を国が認定する仕組みになった。生物多様性の「維持」に加えて、管理が放棄された土地や開発跡地での生物多様性の「回復」や「創出」も新たに対象になった。申請が相次いでいることから認定審査会の回数を年度に2回から3回に増やすなど体制を強化している。

環境省地域ネイチャーポジティブ推進室の奥村悠介室長は「都市部の緑地や里山は日本の生態系を特徴付ける場だ。（国立公園のような）保護地域以外のこうした場所が大切だと知ってもらうことも、自然共生サイトの目的だと考えている」と意義を語る。

ただ、30年に30％という目標に対し現状保全されているのは陸の面積の21.0％、海の13.3％。機増しているが道半ばだ。環境省はサイトを管理する団体を企業が支援するのを後押ししている。

感性すくすく 森の幼稚園

植樹募金に協力し、今も見続ける人たち。広葉樹の真ん中に立つ高さ2メートルの草花が咲く。ヤナギなども繁茂している。約3メートル離れた所に「付属自然教育園」という平屋建ての建物があり、園児たちは、ここを拠点に自然観察会などを行っている。

園長の真小中さんは、「園舎の建物は、ほぼ全て木造。広葉樹の林がだから、夏涼しく、冬暖かい。ここが、子どもたちの感性を育てる場だと思っている。森の幼稚園を始めてから、ずっとそう思っている。」と話す。

園児の中に、ケヤキの大木などがある北本みなみ幼稚園（埼玉県北本市）。園舎の真小中さんは、「ここが、子どもたちの感性を育てる場だと思っている。」と話す。

園庭にケヤキの大木などがある北本みなみ幼稚園

園舎を通過するなかで、樹齢を重ねた木の中を押したのが、東大教授を務めた故茅誠司氏さんのエンボジウムだ。茅さんは、「自然を観察する会」を発足させ、「自然を観察し、感じ、考えること」を提唱した。自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。

その後、茅氏さんと親交のあった、故井上ひさしさんが、「自然を観察する会」の顧問に就任。「自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。」と提唱した。

その後、茅氏さんと親交のあった、故井上ひさしさんが、「自然を観察する会」の顧問に就任。「自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。」と提唱した。

その後、茅氏さんと親交のあった、故井上ひさしさんが、「自然を観察する会」の顧問に就任。「自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。」と提唱した。

その後、茅氏さんと親交のあった、故井上ひさしさんが、「自然を観察する会」の顧問に就任。「自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。」と提唱した。

その後、茅氏さんと親交のあった、故井上ひさしさんが、「自然を観察する会」の顧問に就任。「自然を観察し、感じ、考えることで、子どもたちは、自然を愛する心を育てることができる。」と提唱した。

寄付募集中

つくば万博の森

温暖化から地球を守ろう

森林文化協会は、朝日新聞社が創刊100周年を記念して1978年に設立しました。

「山に木と人の共生」を基本理念に森づくり支援や普及啓発など、地球環境の保全に向けた活動を続けています。

地球温暖化を抑え、生物多様性を維持するために、森を守り育てることが大切です。

皆様の温かいご支援をお願い申し上げます。

ご寄付に関心がある方は、ホームページからお申し込みいただくか、お電話にてご連絡いただければ、必要書類をお送りします。

●お支払いはクレジットカード、銀行、コンビニが利用できます。
●公益法人として寄付金には税法上の優遇措置が適用されます。
●寄付金は分割でも受付けています。

■賛助会員（年会費4千円）を募集しております。詳しくは右記問い合わせ先までご連絡ください。

企業と森のマッチング事業も展開中

私たちは、2030年までに陸地と海域の30%以上を健全な生態系として保全しようという国際目標（30by30）の理念を共有し、環境が豊かな都市部近郊の森林・里山、環境経営に意欲的な企業をつなぐ公益事業（自然共生の森づくりプロジェクト）を模索しています。手入れが十分行き届かない森林の所有者や、ウェルビーイング経営に資する活用したい企業からの情報を必ず待っています。

公益財団法人 森林文化協会

TEL:03-5540-7686 www.shinrinbunka.com/

2025 年 10 月 2 日付朝日新聞朝刊に掲載された
特集面「つくば万博の森　開設 40 年」の紙面

第2種郵便物認可　朝日新聞　2026年(令和8年)2月12日(木)　13版S　18

森の循環サイクル 企業が一役

企業による森林の活用が広がっている。働く人のウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に良い状態）に役立てようと、森で研修などを行う企業が相次ぐ。木造の中高層ビルも増えている。脱炭素社会に向けて森林が注目される一方、植林された木が利用期（切りどき）を迎えながら十分利用されず、荒れた森が増えていることが背景にある。（松村北斗）

社員の健康アップ 学生と持続可能性探る

兵庫県宍粟市で2025年11月、林業研修を行った社員事業者の森林文化協会（東京都新宿区）は、山梨県小菅村で学生らをアドレナル界隈（人体の中で特に活発に働いている部位）の環境調査の講義を受けたりした。「株式会社のスピリチュアリティー（神秘的な力）を高めるため、研修を通じて、年に1度は、高知県（仏教の聖地）や高知県梼原町、森林保全団体more treesなどを訪ねる。社員が異文化に触れることで、企業の価値観の向上につながる。参加者の選抜や意思決定の協定を結び、「AOYAMAの森」（梼原町）では、社員が異文化に触れる多様性のある経営につなげる。」と話す。

森の中で地面に寝て、リラックスする参加者 ＝2025年11月、兵庫県宍粟市

宍粟市は、2022年度から、森林を活用した研修プログラムを開発し、企業や自治体関係者が参加した。参加者は、ガイドの案内で散策し、木の幹に手を当てて深呼吸したり、森の音に耳を傾けたりして、自分たちの感覚を研ぎ澄ませる。参加者からは、「今度は自分の心だけを連れてきたい」などの感想が寄せられた。

参加者からは、「森の魅力を実感できた。今度は自分の心だけを連れてきたい」などの感想が寄せられた。

宍粟市は